

＜書 評＞

三宅 貴夫 編（京都・堀川病院）

老人呆けの理解と援助

長谷川 和 夫（聖マリアンナ医大）

“老人呆け”は、おそらく“老い”にともなう最も困難なそして早急に解決を迫られている問題であろう。老年医学の領域では“老人呆け”についての研究が輩出しつつあり、保健、医療および福祉関係の分野でも広い関心をもたれている現状にある。こうした時期に、本書のように“老人呆け”の問題点を明らかにしようと試みた傑作が出されたことは誠に時宜にかなったものといえよう。

編著者の三宅貴夫氏は、長年の間呆け老人の診療に実践の道を歩み、ことに“呆け老人をかかえる家族の会”の設立と育成に貢献している。編者を含む20名の著者は、老年学、公衆衛生学、精神科医、看護婦、ケース・ワーカー、保健婦、ボランティア、老人ホームの施設長、体操療法主任および呆け老人の家族等、実に多岐にわたる領域の方であって、それぞれの立場は異なるが、すべて呆け老人のケアに直接かかわっていることが注目される。

本文は、まず老人呆けの懇切な解説から始められる。老人呆けとは何

をさすのか、症状と状態像の記載があり、さらに老人呆けの原因には、一次要因と二次要因があって、後者による症状には改善の可能性があることを明快に説いている。

続いて、呆け老人の実態について東京都福祉局の調査資料に基いて、その出現率が46%であることや、さらに在宅呆け老人の介護状況について「呆け老人をかかえる家族の会」の会員約900名に行ったアンケート調査資料にもとづいてのべている。すなわち呆け老人は70～80歳代の年齢のものがおよそ8割を占め、また呆けの期間は1～4年に集中し、介護者の90%は女性、その年齢は40～50歳代のものが半数以上であったこと介護上の困難な点が明らかにされている。呆け老人への看護者による援助として、基本的なケアの原則がのべられている。呆け老人とのコミュニケーションのもち方、観察の仕方、日常生活の援助、精神症状と問題行動への対処の仕方、あるいは偶発事故の防止などが具体例をあげてのべられている。また食事、排泄、失禁、弄便や床ずれなど呆け老人の

ケアで最も困難な問題に生活用品を通しての具体的援助が記述されている。

さらに家族の役割や家族の連帯による援助が、さまざまな具体例をあげて詳述される。このなかには、

“呆け老人をかかえる家族の会”の結成や活動についての報告が含まれている。地域医療と社会福祉サービスの総合的支持体制のなかで医療担当者が、どのような役割をもつべきか、あるいはソーシャル・ワーカーがどのような立場をとってかかわってゆくのか、分り易い解説がつづく、そして特別養護老人ホームの役割が、ここでも具体的な経験から、ショート・ステイの実際を含めて処遇の問題がとりあげられている。その他、老人病院での運動プログラム、音楽療法によるリハビリテーション、内科病棟や精神科病棟での看護事例、家庭介護の事例など、呆け老人のケアにとって、多様なアプローチが記述されている。呆け老人のケアについて、これ程具体的に解説と実際の事例が丁寧に記述された著書は他にない。医学書院の既刊“老人のぼけの臨床”（柄沢昭秀著）とあわせて読むと、一層呆け老人の介護について理解が深まるであろう。

（A5、頁252、1982、¥2,500、医学書院刊）